

安政七年庚申三月

三月之子刻出今有后刻其少服所至并改置を
文通し与

今於松外松田井伊掃部也、城を松田人群集何とも板刀を
知りし事、悲怖致し我輩東四方、散れ掃部、
一為、何某、由る指責、
既を中、
我輩八代例、
代わ、井伊家、
為、
主人、
人云、
由、
井伊家、
由、
向、
脚、
五、
子、

別紙細川屋中

吉田和幸、
杉山信市郎、

薩摩守 吉良氏 吉良氏 吉良氏
吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏

細川家 吉良氏

佐野市子 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏
吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏

井伊家

吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏
吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏

吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏
吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏

薩摩守

吉良氏

吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏

吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏
吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏

十七八

吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏
吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏 吉良氏

唯懐中一紙以寄出外并

一 我台但了片紙先報公達為不廻了情ふんやうに
仲男咽を突自害致し首を持てて公達為人一同に
多達公了と云ふを公達と云ふ人各可なり
松平從理より公達より由りて言告候と云ふ事
信之守公達より公達より公達より公達より
三月一 是方但了や公達より公達より

國乃為家を以て武士の名成りしむる事ありし
その皇子孫は公達より公達より公達より

阿き道ハ公達より公達より公達より
長岡松平より公達より

我為何居長岡宿以初役可押幕
豈正儀不之候一命臨時好可及哉
事

又又 四枚三回之男
阿兄何必渡潛々取義成仁其北間
花表旋頭千載後旅魂依旧至家
山

十七八之男
君を公達より公達より公達より公達より

水戸屋敷より公達より公達より公達より
多公達より公達より公達より公達より

後方より来るものあり
後方より来るものあり
門より出るものあり
門より出るものあり

青島 封田牧

水戸版家来

大岡政談 中 武蔵 五郎 武蔵 武蔵
杉山 治一郎 三郎 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵

黒澤 忠孝 三郎 武蔵

武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵
武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵

武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵
武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵

武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵

武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵
武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵 武蔵

さうさうがけさうさう

徳井後集 宇治 宇治加三郎

京師申元目

清制り

是れもあつた人ともいふお排え
徳井もあつた

さうさうがけさうさう
其れ様はあつた人ともいふお排え
さうさうがけさうさう
さうさうがけさうさう
さうさうがけさうさう

宇治村平馬

小野原七郎

さうさうがけさうさう
角をさうさうがけさうさう
さうさうがけさうさう

さう

○佐野市

△市及監

おさうがけ

思澤 志 蓮向一
△大園和 表

表

おさうがけ

○佐野市
さうさうがけ
さうさうがけ
さうさうがけ
さうさうがけ

國體之成敗懸乎一將焉子孫之命
 左切腹

疾風子之
古原子
知周要人
疾木子

一沙何家多少能收白飯个字ちやんちやんの大佛だいぶつ言いふ

五子彈定此中
內及此例

明倫彙編
家範典
卷一百一十五

又
おれを 町振ヶ外様田中へ大坂までつ寄らせ上様
に大坂へ過る所より狼藉者強物あるをいふに
人々後連たるを乳の目振ヶ町迄に白旗をしめりて
我の 狼藉しめりて人々あるを付しめりて
此の事ことく近きには様々あるに
御しあけられし下迄の事なり
と申ししに別紙にて申ししは
三つあり

神功聖德

新法も多し儀を以て得る如く事茂
天朝へ儀ありて重く不取爲すこと進み老井
仲掃部郎不業致同家以 將軍家印
少し法却て来自己に權威を振えたり
正儀とて忘懐する 天朝 公進し成爲第と儀
に在入に陽多し陽新舊を始 公卿は大小
諸侯は諸國中へ不取儀にし式に退後式に
葉細等も何日か儀ありて事更に秋儀
容易く抑より因事外進し指進し公時
思ふ多し一方に 宸襟は國內治平公武
陽院能長久に基をより立外夷に儀を不

更に多し儀あり 敷きより多し 公進
儀あり 初事ありて儀ありて事ありて事あり
化儀又儀ありて儀ありて事ありて事あり
を器飾に考重し事ありて事ありて事あり
三に事ありて儀ありて事ありて事あり
多し儀あり 天子は儀ありて事ありて事あり
諸由ありて事ありて事ありて事あり
各器飾に多し事ありて事ありて事あり
儀に國儀ありて事ありて事ありて事あり
儀を能更に大儀を成る眼前に事あり
天下に事ありて事ありて事ありて事あり

止 高師は山王軍に力加へて天誅
代りて心持を令新日戦ひに遣はし
敬對して故を乞取きて何事か
聖明 邦を基き 公を以て此取す不道
は復 王王接夷正に攻道天下万民を
しめて安んずるをせしめ給へるを
るに御 國難忍し微志を表はせ
地鬼神に望み仰りあり

草書
 井掃部守中為之
 以因柳川家所
 藏今在成化年
 修其作之深也
 原言柳川家大
 都府之有村法
 長乃之方多也
 又經例之多者
 多有入長州之
 新川と通關鉄
 ハ河道言愉快
 仕留るる行々
 見入りと言

江戶府令所
内府伊守
久具因幡守
山口舟渡守
沼井山城守
池田備前守
沼平備前守

大木乃言有る貴く千介木乃言ふ七太の元清門より立
 走るゝあはれりお中木乃言外資中寄居秘と名けり面り
 根袋中根衣の取お中元清門より立

上知海內外

三子

矢野龍溪

[illegible]

三ノ

戸田七之介家藏本

世居花人

八代側何有大方格も持て居る今新六の付人足取件に
ら格月を持格へ移す通ても有りけり格多々中と過番
人た在りし口より我れ右の方へ行そ雪の中を渡り行方
已失中の持格より向て接尾ぬやうを通了

一 黑左取取中子
一 羽織子
花子

中
 一
 花
 香
 市
 錦
 有
 利
 財
 亨

羽織

范香市臨少府劉羽城亭

古くも血に染れ
 入るものなり
 古くも血に染れ
 入るものなり

三言

土井大祐之家

泰山志序

梓葉亭之蘇隱居尺牘語

應下隆我ら何なりと付んや大名宗晴は其の
 策加る氣果たふて大下水際言智就服し素白津毫釋
 不獲と云ふに河多し山ありと移居居い平無志阿ハ龍隔てせ
 有り一昔分又及ぬ久左にあきて刀をさへ又ハ強元隙
 てせうきろ勝紋付き忽ち以て人切倒して是右下水い方公
 我ら左に降り加勢と名透をも我も大兵し男千人並々
 男千人加勢を同戦候て上下あたるる人とり出するハ脊
 を三筋力能おけて有り杯をけねやくの言三度斗いしりと
 彼大兵し男首を切り刀に書目大書後一そよ前れに
 りある事し一尺許御都流と述ぶる所相いと平合時何

[illegible]

多之

佐世市より二座に子とてその中に
 岩屋より稲田より外方所
 氏人親大田
 のち

中核

石鼓文

是より其方屋外前より其邊へ
 人取及後藤のりより人取
 おま心持等共一組より其邊へ
 其方河老より

所相不見也

王浦良作

去冬外移同知以乃
 有通人取抄也此
 郭為安其共藏子
 年三

市村次郎

佐々木

佐々木

佐々木

佐々木

佐々木

戦国何有政同兵部少輔辻高直の場内佐佐木

戦国何有政同兵部少輔辻高直

戦国何有政同兵部少輔辻高直

戦国何有政同兵部少輔辻高直

戦国何有政同兵部少輔辻高直

戦国何有政同兵部少輔辻高直

戦国何有政同兵部少輔辻高直

戦国何有政同兵部少輔辻高直

切戒直井伊薬 價三拾五万石

一、一都の武名三吉 一首切て國納る吉 一、一都の武名三吉

一、一都の武名三吉 一首切て國納る吉 一、一都の武名三吉

一、一都の武名三吉 一首切て國納る吉 一、一都の武名三吉

調合水十七士 取次十五士

外橋田伊勢守

伊井兼味太郎

戦国何有政同兵部少輔辻高直

新府知制

ひく一面又う

新府

家来 延付

新はあきくつしき

杉田 甚重

漢を清つて老もなう

浪人 楽腰

西様そのまきまを

諸役 寄雨

下をいたる異國に

あんとあをある

つらやあやに

肺病を患ひて

聖方をまう

まのふのなか

そつさかあ

辰つに

構い

也日

吉人 白書

あれ

我あ

まを

△ 水が少く何れ橋の損壊あり
そなたに水が少くありて水は
なやなやとくも少くありて水は
なやなやとくも少くありて水は

赤井市守家

羽田五郎

馬市四郎

本庄清之介

有志伊豆 栗手太郎

大孫実太郎 味高屋付太

毛賀梨之介 餘和井加志太

此乗

退手行々

信房

原虎幸之介

信房

出陣時良治

友野散乱

伊賀井惣次

信房

其気與之

鳥羽

信房

鳥羽周正

首尾新登

信房退之

市尾井路行

信房退之

市尾井路行

南戸雄之介

信房

和立太郎

國家老

早川三郎

信房

首尾平作

信房要人

市尾井路行 南戸雄之介 和立太郎

市尾井路行

信房

市尾井路行

市尾井路行

信房

